かえりみち

結晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かえりみち

【Ｎコード】
Ｎ５４９４Ｔ

【作者名】
結晶

【あらすじ】
母親からの電話を受け、数年ぶりに実家に帰ることにした夏美。気が進まないままバスに揺られて向かったが、気付けば見知らぬ土地に。どうやらうっかり乗り過ごしてしまったらしく……。
全４話からなるホラーです。「文学」に分類してみたけれど文学でいいんだろうか、と探り探り投稿しています。
完結しました。

はじまり（前書き）

序章部分になります

はじまり

「結婚するから」

久々に鳴った携帯電話の向こうから、戸惑いがちな声がそう言った。

数年ぶりにかかってきた、母からの電話。

「そう」

それだけを返した。他に言葉はみつからなかった。

「今、どこにいるの」

「同じよ。前言ったでしょ、あの住所と同じ」

「……そう」

沈黙が落ちる。静かな息遣いだけが電話越しに聞こえる。

「……帰ってこない？」

躊躇いながら、母はそう投げかけてきた。散々迷ったような、そんな気配が感じられた。

「たまにはご飯でも食べに帰ってこない？　お盆も近いし……」

「無理よ、休めない」

勢い込んで話す言葉を、突っぱねる。

「あ、ええ、そうね……なら、休みが取れたら」

母の声が落胆の響きを帯びる。

罪悪感に、ちくりと胸が痛んだ。

「いつでも帰ってきて。連絡くれたら近くまで迎えにいくから」

ふと目を上げると、少し開いた窓が目に入った。夏のぬるい風に翻る、薄手のカーテン。その先に広がる青空を透かし見て、

「……とれたらね」

言って、電話を切った。

「言い忘れたな」

おめでとう。
その言葉が、出てこなかった。

壱

「あり得ない……」

遠ざかっていくバスの古ぼけた車体を見送って、夏美は思わず呟いた。

手には鞄がひとつ。旅行用というほどに大きなものではなく、ごく普通のやや大きめな手提げだ。

夏美は実家に帰省する途上であった。

電車とバスを乗り継いで数時間の距離。飛行機の選択肢もあったが、あえて時間のかかるルートを選んだのは、ひとえに気が乗らなかったせいかもしれない。

高校を卒業してすぐ飛び出してきた家。気付けば四年の歳月が流れていた。今更、募る話もない。

会社には実家に帰る、という名目で休暇を取った。実家と言っても、母がひとり暮らしているだけの都会のアパートである。その気になれば日帰りも可能だ。

けれど、夏美はいつもより多く休みを取った。別に実家でのんびりしようというつもりではない。実家に帰るのは単なる口実にしかすぎなかった。一応、実家にも顔を出そうとは考えていたが、半日程度の滞在で切り上げて、後は幾つか温泉宿などを巡ろうと考えていた。

ところが、今夏美の眼下に広がっているのは昔話にでも出てきそうな穏やかな村落。

風の音と葉擦れの音しかしない悠久の風景を前に、夏美は途方に暮れる。

完全に、寝過ごした。

鞄ひとつを膝に抱え、バスに乗ったことは覚えている。車窓から

流れる景色を見ながら、その後の道程を考えた。先に実家に顔を出し、近くのホテルに移動する。翌日からは事前に予約をしておいた温泉宿を巡ろう。そんなことをつらつら考えていたのを最後に、記憶は途切れている。

気付けば、車窓からの風景が見知らぬものになっていた。ビルの間を走っていた筈が、緑陰生い茂る山間の風景に。

咄嗟に降車ボタンを押した。

とにかく降りなければ、とそればかり考えていた。

そして気を揉みながら降りてみれば、いかにもな田園風景が広がっていたのである。

「どうしようかな……」

溜息と共に呟いて、携帯電話を取り出した。

電波表示は完全に「圏外」。

表示されている時刻を眺め、すぐ脇の古ぼけた停留所を見る。

鉄製のそれは腐食が進み、停留所の名前すら判別が難しかった。風雨でぼろぼろになった時刻表を覗きこんで、どうやらたった今降りたバスが最終であった事に気付く。引き返そうにも、そちらの方はだいぶ前に最終便が通過してしまったようだ。

「4時が最終とか、田舎すぎ」

この光景で覚悟はしていたが、さすがに落胆は隠しようもない。

夏美は、黒ずんだガードレールの遥か下方を見遣る。

生い茂る緑の向こうに、ぽつぽつと立てられた民家が見えた。田圃と畑と、雑木林。家々の間を小さな川が流れる。

絵に描いたような、田舎の風景。

道路よりずっと下に広がる光景に、夏美は頭を抱えた。ガードレールに鞄を乗せ、抱きかかえるようにして唸る。

「困った……」

バスは最終、携帯電話は使えず、気付けば時計は5時を示している。

ちらりと視線をやれば、元来た道の先にトンネルが見える。そち

らが帰り道なのは分かっていたが、さすがに歩いて帰るわけにもいかない。こんな時分から歩けば、町にたどり着く前に夜になることは目に見えている。

こうなったら、どこかの家で電話を借りるしかない。料金が心配だが、近くのタクシーを呼んで、街まで運んでもらおう。

夏美は腹を括り、きっと顔をあげた。

鞄に付けたストラップが、ちりん、と涼やかな音を立てる。中心に鈴を入れた、ビーズ製の鞠だ。

いつだったか、母が手作りしたものだ。手先の器用な母は、暇をみつけてはよくこういった小物を作っていた。夏美自身はこういうものにはあまり興味がなかったが、このストラップばかりは鈴の音とその色合いが気に入り、譲ってもらっていた。

無意識にストラップをいじりながら、夏美は村を一心に見つめる。道を行く、或いは庭仕事にでも出ていそうな人影を探した。いきなりお宅訪問、などと何かのセールスにでも間違われたら面倒である。

動く影を探していると、ふとすぐ下方に人影が見えた。

バス停の脇から伸びる、細い道。舗装などされていないその道を、村の方から登ってくる人影がある。

半そでのTシャツに、麦藁帽子。首にかけたタオルで汗を拭うその姿は、まだ若い。大学生くらいだろうか。夏美とそう年は変わらないように見えた。

村のイメージからてっきりお年寄りしかいないものと思っていた夏美は、少なからず驚いた。

ついまじまじと眺めていると、相手がこちらに気付く。

「あれ」

首を傾げて、こちらを仰ぐ顔には不審がる色はない。

「見ない顔だね、どちらまで？」

「あ、い、いえ。そういうわけじゃなくて……その」

夏美は口籠る。バスで寝過ごし、誰かいないかと物色していました、とはさすがに言えない。

「ああ、乗り過ごした？」
すると、何でもないことのように青年が言った。
「無理もないよ。この辺りは停留所と停留所の間隔がすごく長いから」
「あの、よくあるんですか？」
そんなに頻繁にあるものなのだろうか。少しほっとして、思わず尋ねる。
相手はいたずらっぽく笑って肩を竦めた。
「いや、そうじゃないけど……俺も昔はよく乗り過ごしていたからさ」
高校の時だけどね、と笑う。
「この時間だと…もしかして最終じゃない？」
さすが地元だけある。よく把握しているようだ。
「ええ。そうみたいです」
自嘲気味に笑う。恥ずかしくて、顔から火が出そうだ。
「そうか…そろそろ日も暮れてくるし、とりあえずついてきなよ」
青年はひとつ頷いて、夏美に「おいでおいで」と手招きをした。
つかの間、夏美は迷う。
脳裏をさまざまな事件の記事が掠め、躊躇った。
この人は「安全」な人だろうか。
けれど、他に選択の余地はないような気もした。結局は、電話を借りるべく誰かに声を掛ける必要があったのだ。むしろいいタイミングだったと喜ぶべきなのかもしれない、と思い直す。
意を決して、夏美は鞄を持ち直し足を踏み出した。道の勾配はかなりきつい。ごつごつした斜面を転げそうになりながらも、やっとのことで下る。
青年は少し離れたところで眺めていたが、夏美の様子を確認すると穏やかな足取りで歩きだした。
夏美が追いついて来た所で、青年が話しかけてきた。
「それにしても災難だったね」

こんな田舎で、と青年は笑う。
夏美はなんと返しようもなく、曖昧に笑って誤魔化した。
確かに街中であれば、多少の乗り過ごしなどどうにでもできただろう。すぐに引き返せない距離だとしても、宿を取るのもタクシーを呼ぶのもそう難儀はしないはずだ。
「誰か迎えに来てくれるの？」
青年の問いかけに、夏美は首を振る。いつ帰るとも連絡はしていない。連絡したところで迎えがあるなどと期待していなかった。
「そうか。それならタクシーを？」
「ええ、そのつもりだったんですが……携帯が使えなくて」
電話をお借りできませんか、と続けようとした夏美だったが、青年の言葉に遮られる。
「ああ、それならいい案があるよ」
「え？」
「うちに泊まればいい」
あっさりと言われた言葉に、夏美はしばし固まった。
何を言っているんだろう。思わず真剣に相手の思考回路を悩む。
そんな夏美に、青年の方も失言に気付いたらしい。慌てて訂正をした。
「あ、違う。変な意味じゃなくて。
ちょっと前まで民宿してたんだよ、うち。部屋が有り余っている上に離れまであるし、君ひとり分くらいは余裕で大丈夫だから……それでどうかなって」
そうなんですか、と夏美は無難な相槌を打つ。
その言葉が真実ならば、納得できなくもない。だがそれが真実である保証もまた、ないのだ。
「ご厚意は有難いんですけど、そんなに手持ちもないので」
警戒の理由を摩り替えて、丁重に夏美は断りを入れた。
元々宿泊するつもりはないのだ。見知らぬ土地で行き当たりばったりで行動できるほど、夏美は豪快な性格はしていない。

夏美の辞退を聞いて、青年は頬を掻きながら言う。
「宿代は必要ないよ。もう民宿はしてないからね。それに…ここからタクシーは結構かかると思うけど」
ここは山深いしね、と青年。
その申し出と情報に、夏美の心は一瞬揺らいだ。
青年の申し出はありがたい。まさに渡りに船だ。だが例え高くついたとしても、タクシーを呼んで手近な町に移動する方が得策だと思える。青年の言葉を無条件に信じられるほど、相手をよく知らないのだから。
「ええ、でも……」
断ろう、と言いかけたところを再び青年に遮られた。
「ああ、勿論俺ひとりじゃないよ。家には母と、親戚の子供もきているんだ。あと数日もすればうちは夏休み帰省中の親戚でごった返すからさ、大人数用の準備はできてるし、そこに君一人増えたところでどうってことないよ」
畳み掛けられて、夏美の気持ちは更に揺れる。
タクシー代もばかにならないのなら、ここで一晩屋根を借りる方がずっと財布に優しい、ともう一人の自分が囁く。
「でも申し訳ないから……」
いくら商売はやめたとはいえ、人様の厚意に甘えすぎる。乗り気半分、断る気半分で、微妙な返事をする。
「そんなことないよ。母も親戚も、賑やかなことが好きなんだ。ね、本当に疚(やま)しい気持ちはないから。安心して……って訳にもいかないと思うけど、不安なら母の部屋の近くに通すし」
どうかな、と首を傾げて青年は伺ってくる。
視線がまともにぶつかって、夏美の心臓が跳ねた。胸の内に閃いた感情。その甘い香りを纏った感情に驚き、反応が僅かに遅れる。
「え、いえ」
ここで戸惑うのは失礼かもしれない、と夏美は思う。断るにしてもあからさまに相手を警戒しているのだとは思われたくなかった。

そんなの、まるで自意識過剰みたいではないか。
「そういう訳じゃなくて、その、ただで泊まらせて頂くわけには……」
狼狽しながら、夏美は必死に言葉を探す。
青年はほっと息をついて、そんなことかと呟いた。
「構わないのに……真面目だね。じゃあ五百円だけ、宿泊費として払ってくれる？」
笑いながら譲歩として示された条件は、ままごとのようなものだった。
「五百円って」
それではあまりにと言いかけたが、青年は「ん？　高いかな？百円？」とさらに値下げの気配を見せる。
夏美は慌てて首を振って、勢い込んで言う。
「それで。五百円で、お願いします」
力強く言ってから、夏美ははたと我に返った。
宿泊するつもりなどなかったのに。確かに気持ちは揺れていた。揺れていたが、断る気も勿論あったのだ。ところが、気付けばはっきりと「宿泊する」と宣言してしまっていた。
しまった、と思ったが、今更撤回するのも何か恥ずかしい。
もしかして乗せられてしまっただろうか。
ちらりと青年を仰ぐと、青年は相変わらず人好きのする笑みを浮かべて、何やら頷いている。
「ああ、よかった。君のおかげで欲しかった本が買えるよ。ちょうど五百円足りなかったんだ」
そんなことを、嬉しげな様子で語る。
冗談めいたその言葉が、彼の人となりを表しているようで。
夏美は少し肩の力を抜く。きっと、悪い人間ではない。善い人ではないにしても。
「……いくらの、本なんですか？」
だから、夏美は戸惑いながらも問いかけた。勿論、本に興味など

なかったけれど。
「ええと、確か五百二十円だったかな」
じゃあ二十円しか足りてなかったんじゃないか。
胸中で呟いて、夏美は思わず小さく噴き出した。咄嗟の冗談にしても不出来。それが可笑しかった。
「あれ、笑われた。貧乏とか思っただろ」
「いえ。そんなことは」
「これでも日々汗水流して貯めたんだよ、二十円」
苦労したんだけどなあ、と生真面目に言う顔がさらに夏美の笑いを誘う。
「そうなんですか」
そんな筈はないけれど、相槌の打ちようもなくて、笑いながら夏美はそう返す。
「まぁでも、よかった。歓迎するよ。ええと……ああ、自己紹介がまだだったね。俺は、真城聡。聡ってよんでくれよ。この辺は真城姓が多いから。君は？」
「三壁夏美です」
「三壁夏美さん、だね。……名前で呼んでも？」
にこやかに笑って、聡は言う。
夏美は曖昧に頷いた。
なれなれしい、とは思わない。相手がそう呼びたいのなら好きに呼べばいい、そう思っていた。恐らくこの先会うことのない相手だ。些細なことで目くじら立てる必要もないだろう。
何はともあれ、当面の目処はついたのだ。
まだ少し戸惑いながらも、夏美は自分に言い聞かせた。小さく息をついて、鞄を肩に掛け直す。ちりん、と鞄の鈴が鳴った。
「重そうだね。貸して。持ってあげる」
聡がすい、と手を差し出した。
夏美は驚き、首を振る。そんなつもりで息をついたのではなかった。

「いえ、いいです」
「遠慮しないで。大丈夫、盗ったりしないから」
にこにこと笑う。夏美の不安を見透かしたような言葉に、どきりとする。
彼はいい人だ。
夏美は再び自分に言い聞かせる。昔から用心深い性格の夏美は、警戒しすぎて他人となかなか親しくなれない面があるのだ。
ひとつ呼吸をして、心を落着ける。
「……じゃあ、お願いします」
素直に鞄を聡に渡すと、聡はおどけて「お預かり致します」と腰を折った。
思わず笑うと、聡も嬉しそうに目を細めた。
「改めてようこそ。短い間だけどよろしく」
言って、聡は穏やかな笑みを浮かべた。

聡の後についていくと、村の中心部に位置するあたりに、古い家が見えた。
木造の二階建て。重厚な雰囲気の、昭和初期か明治あたりのそれに近い、古いつくりの建物だ。
「ここだよ。古いだろ」
聡はそう言って、玄関の引き戸をカラカラと開ける。
「母さん、お客さん」
「……お邪魔します」
夏美は小さくなりながら、玄関をくぐる。
玄関は民宿をしていたというだけあって、民家にしては広い。旅館というほどでもないが、結構な広さがある。
玄関脇の棚には猛禽と思しき鳥の剥製。
美しく活けられた季節の花。

今でも十分、民宿として成り立っていきそうな佇まいである。
「お帰り、散歩に行くって出ておいて……お客さんだって？」
奥から顔を出したのは、聡の母親と思しき女性だった。
夏らしい柄の小袖を纏い、髪をすっきりと結い上げている。若くても四十歳は越えているだろうが、その上品な姿からは二十歳過ぎの子供がいるとは到底思えなかった。
「あらまあ、可愛いお嬢さんだこと」
夏美を目にするなり、彼女は口元に手をあてて品よく笑った。仕草のひとつひとつに、何とも言えない色香がある。
「バス、乗り過ごしたんだって」
「ああ、最終ね。それはさぞ困るでしょう、二階でよければどうぞ」
聡の簡単すぎる説明に、彼女はあっさりと頷いて先にそう促した。
案外よくあることなのかもしれない。二人の慣れた態度に夏美は思う。
「あの、御迷惑では」
展開の速さに戸惑いつつも、夏美は一言ことわった。元民宿とはいえ、普通ならやはり見ず知らずの他人を家に入れるのは迷惑だろう。そう思ったから。
「迷惑なものですか。お客は歓迎ですよ。こんな仏頂面の息子と二人きりじゃあ、つまらなくて」
さあ上がって上がって、と彼女は夏美を促す。ぼんやりしていたら、そのまま腕を引っ張られそうな勢いである。
「はい……その、ありがとうございます。お邪魔します」
目をぱちぱちと瞬かせながら、夏美は礼を述べる。
面食らいつつも助かった、と思う。
「ご挨拶が遅れましたね、聡の母で百合江です」
「三壁夏美です、お世話になります」
百合江に言われ、慌てて夏美は頭を下げた。
「ちょっと部屋を見てきますから、どうぞそちらでお待ちになって」
通されたのは、やや広めの和室。中心に重厚な質感のテーブルが

置かれている。床の間に綺麗な模様の花瓶が置かれ、夏の花々が飾られていた。
ひとつ息をついて、夏美は入口のそばに座り込んだ。畳のひんやりとした感触が心地よい。
室内をぼんやり眺めていると、夏美の隣に聡がやってきた。
「ああ、暑かった」
「あ、ありがとうございます」
鞄を持って貰っていた事を思い出し、振り向く。
聡から鞄を受け取る際、ふと違和感に気付いた。
鈴が鳴らない。
首を傾げて鞄を持ち上げると、聡がばつが悪そうに言った。
「ごめん。実はさっきぶつけちゃって……どこか破いたかな」
体を小さくして、申し訳なさそうな様子の聡に、夏美は首を振る。
「いえ、その……ちょっと鞄の締まりが悪くて。荷物の入れ方が悪かったみたいです」
笑って嘘をついた。
ストラップが壊れたなどと知ったら、気を遣わせることになる。
困ったところを助けて貰ったのだ、このくらい気にすることでもない。
そう結論付けて、夏美は鞄を置き直す。
頃合い良く、奥から再び百合江が姿を見せた。
「お待たせ。二階の奥の部屋にどうぞ」
立ちあがり、百合江の案内で部屋へと向かう。
階段を上りしな、廊下側の窓から綺麗に手入れされた庭がみえた。
生い茂る木々の足元に、夏の花が揺れている。
「こちらのお庭ですよね、綺麗ですね」
夏美が心から褒めると、百合江は嬉しそうに言う。
「ええ、中庭です。花が好きなもので」
あちこちに活けられた花を思い出し、なるほどと思う。
「中庭なんですか」

「そうです。あちらに…見えるかしら、離れがあるんですよ」
百合江の示す方向に目を凝らす。夕闇に沈んだ中庭の奥に、言われて見れば建物の影が見える。
「そちらの方が涼しいんですけど…今は使っていましてね」
申し訳なさそうな様子で百合江は続ける。
「親戚の娘さんを預かっているんです。ちょっと神経質な子で…離れには、なるべく近づかないようにしてくださいね」
聡の言っていた「親戚の子」とはその子のことだろう。他人の事情に首を突っ込むほどお節介な性格はしていない。はい、と相槌を打って、夏美はすぐに忘れてしまった。
「涼しい部屋」と案内された部屋は二階の奥の部屋だ。四つほどに仕切られた小部屋の一つだったが、思っていたよりずっと広かった。
床の間に風景画の掛け軸が架けられ、こちらも花瓶に夏の花が活けられていた。
窓の外を覗くと樹木の陰が見える。なるほど、これならば朝の日差しをだいぶ弱めてくれるだろう。
涼しい、の意味を理解して、夏美はひとまず鞄を置いた。
夕食をふるまってくれるという百合江の好意に甘えて、三十分ほどしたら下に降りるつもりだった。
下手なホテルに泊まるより、ずっとよかったように思える。
不幸中の幸いだったな、と百合江と聡との出会いに感謝した。

弐

誰かが泣いていた。
真っ暗な闇の中、細い人影がしゃがみこんでいる。
質素な身なり。ひとつにまとめた髪はばらばらにほつれ、華奢な肩に落ちかかる。
あれは、母だ。
また、殴られたの。
その言葉に、母は曖昧に笑う。
いい人なのよ。
それが母の口癖。自分に言い聞かせているような、その言葉。
本当にいい人は殴らないのよ。
喉元まででかかった言葉を、胸の中に仕舞いこむ。きっと母もわかっているはずだ。
いい人なの、本当に。
幾度となく、母は繰り返す。
ある男には殴られて。
またある男には金をつぎ込んで。
いい人だったのよ。
騙されて、傷ついて、捨てられて。
それでも母は「いい人だった」と振り返る。
母さんさえいればいい。
何度も伝えた言葉。
父親なんていらないから、二人で生きて行こう。
けれど本当に必要としていたのは、母の方で。支えとなる男性の影を追っていたのは、子供の為ではなく。
お前さえ。
華奢な背中が振り返る。その顔に浮かぶのは夜叉。母親はどこに

もいない。醜く引き歪んだ、女の顔だ。
お前さえ……
絞り出すように囁かれた言葉。
その先は、耳に届かなかった。我に返ったのかもしれないし、言わなくてもわかると思ったのかもしれない。
悲しい、とは思わなかった。ただ息苦しかった。
目の前の夜叉を憐れんだ。
女としての幸せを渇望した、母が哀れだった。
ごめんなさい。
あなたの幸せを壊して、ごめんなさい。
私は要らない子なのに。

ぼろぼろ泣きながら、目が覚めた。
涙と、首筋に流れる汗をタオルで拭い、布団から這い出した。暑い。
携帯の表示を見ると、六時を少し回っていた。窓の外はすでに明るくなっていたが、さすがに日差しはまだのようだった。ガラス越しに、蝉の控えめな声が聞こえる。
全身から水分が抜けたような気がして、溜息をつく。疲労でぐったりと重い体を起こし、畳の上に座り込んだ。
「ごめんなさい、か」
随分殊勝なことをと夏美は笑う。
母親に向けて言ったことはないが、内心ずっと思っていたのだろう。母のあの言葉を聞いたときから、常に思い続けていたに違いない。
耳の奥で蘇る、母の声。
「お前さえ」と母は言った。

まだ母親と暮らしていた頃だ。高校に入学して間もない頃、夏美の家は経済的に逼迫していた。
その頃は既に父親はおらず、母は夏美を女手ひとつで育てていた。
父との離婚は、暴力が原因だったと聞いた。暴力に耐えていた頃の母は随分とやせ細っていたと、後々祖母が話していた。子供にもよくないからと、夏美が物心つく前に離婚させたのだと。
それからの十数年、母は父からの養育費と、自らのアルバイトのかけもちで学費と生活費を稼いでいた。そんな日々だったから、母の心はギリギリだったのだろう。
ある日、些細な口論の最中、母はぽろりと零した。
「お前さえ」と。
何と続けようとしたかはわからない。けれどそれだけで夏美は全てを理解した。
母は心のどこかで夏美を疎んじている。理由は関係ない。疎ましく思っている、その事実が夏美の心に突き刺さった。
それから夏美は母と距離をとるようになった。非行に走るようなことはなかったが、家を出たいと強く思うようになった。
高校を卒業して、逃げるように飛び出した。
少ない荷物をまとめて、素っ気無く母に別れの挨拶をした。
また帰ってくるから。
帰る気なんてさらさらなかったけれど。
玄関先で見送る、華奢な姿。化粧っけのない顔には複雑な表情が浮かんでいた。どう表現していいか、悩んで悩んで…表情の選択をできなかったような、そんな奇妙な表情。
今思えば、母の気持ちも理解できた。
若くしてシングルマザーの道を選んだのだ。誰よりも強く、母親であろうと努力していたのだろう。
けれどなりきれなかった。
母親である前に一人の女でもあったから。女としての幸せを得たいと願ったことは、責められない。

母は自分の心の支えになってくれる、或いは自分を守ってくれる男性を追い求めて次々と恋をした。
そんな母の元に現れる「恋人」は、どの男も夏美の目には「最低」に映った。
暴力、酒乱、ヒモ。
幾度痛い目をみても、母は「夫」を探していた。娘の「父」ではなく自分の「夫」となる男性を。
だから、母の結婚話を聞いても驚きは少なかった。一人で生きていくことが出来ない母だから、こんな日がくるのも自然な成り行きだと思った。本当ならもっと早くてもおかしくなかったのだ。夏美という、子供さえいなければ。
『結婚するから』
久しぶりに聞いた母の声が脳裏に蘇る。
記憶の中のそれより、幾分元気そうだった。今度の相手は結婚するに足る人物なのだろう。
きっと母はしあわせなのだ。
畳の上に投げ出された携帯を取る。着信履歴には母の電話番号。
結局「おめでとう」と言いそびれた。
圏外の電波表示を恨めしく思いながら、どこか安堵している自分がいる。
おめでとう。
たったそれだけの言葉を、言うのが難しい。
「帰らなきゃ」
溜息をひとつついて、携帯を鞄に放り込んだ。
衣装掛けにかけた服を取って、身支度を始める。
今日はバスを拾って、今度こそ寝過ごさないように目的地で降りねばならない。その前に百合江と聡にちゃんと挨拶を済ませてから、と夏美は今後の行動について考えを巡らせる。
一通り支度を終えて、ひとまず夏美は廊下に出た。
二階には夏美の他に部屋を使用している人はいないようだった。

どの部屋にも人気はなく、物音ひとつしない。足の下で軋む板の音が、周囲にひどく響いて感じられた。
まだ寝ているだろうか、と思いつつ階段を下りる。
ガラス越しの中庭に、見覚えのある後ろ姿があった。白地のTシャツ。大きく描かれた英字のロゴが、汗でべったりと背中に張り付いていた。首にかけたタオルでしきりと汗を拭いながら、庭の木々に水を撒いている。
「ええと…聡、さん？」
ガラス戸を開けて、おずおずと話しかけた。
名前を呼ぶことには抵抗があったが、わざわざ名前で呼ぶよう言われているのに名字で呼ぶのも…それはそれで躊躇われる。
「あ、夏美さん」
ぱっと振り向いた彼は、随分あっさりとそう返す。
その呼びかけに無理や照れは一切感じられなかった。ごく自然な態度に、夏美は少し面食らう。
「起きたんだ。どう？　よく眠れた？」
にこにこと愛想良く聡は尋ねてくる。
「……あ、ええ。良く眠れた、方です」
実際は悪夢に魘されてよく眠れなかったのだが、そんな告白をして相手に余計な心配をかける必要もない。
「朝早いんですね。日課ですか？」
「そんなとこ。中庭は俺の担当らしいから」
「担当？」
「この時期は結構客が多くてね、だから役割分担ってとこかな」
夏美は軽く首を傾げた。民宿はもうやめたのだと言っていなかっただろうか？
「あ、客って親戚のことね」
こちらの疑問に気付いたらしい聡が補足する。
「夏休みだからね。あちこちから帰ってくるんだ。まぁ山間だから避暑地のつもりなんじゃないかな」

おかげでガキどもが煩くて、と言いながらも、その表情はまんざらでもなさそうだ。賑やかなことは嫌いではないらしい。
「そうなんですか。じゃあ、忙しい時にお邪魔しちゃったんですね」
「気にしないでいいよ。まだ皆到着してないから、余裕」
言われて見れば、子供たちの声がするわけでも、慌ただしい人の気配がするわけでもない。まだ夏休みも序盤ということもあって、到着が遅れているのだろう。
「ね、夏美さん、時間ある？」
「え？」
「折角だから村を案内するよ。といっても田舎だけど、景色だけは抜群なんだ」
夏美は躊躇う。
8時を過ぎれば、すぐにもバス停に向かおうと思っていた。昨日の記憶では一日に2、3本しかバスがなかったはずだ。最初のバスは逃したとしても、その次のバスまで逃すわけにはいかない。
その逡巡を見取った聡が、重ねて言う。
「バスなら、午後3時過ぎに最終があるけど」
暫く考えて、夏美は軽く頷いた。
「……じゃあ、ちょっとだけ」

鞄から携帯だけを取り出し、夏美は部屋を後にした。ジャケットのポケットに携帯を押し込みながら、階段を下りる。
ふと、浮かれている自分に気付いた。
地元の人の案内で、見知らぬ土地を散策する。観光のガイドブックにありがちな、そんな他愛もないことが何故か妙に浮き立つ。
嫌だな、と夏美はひとり呟く。
けれど胸の内にあるのは嫌悪ではない。ふわふわと浮き立つ気持ち。淡く甘いその感覚は、夏美にも覚えのあるものだ。嫌悪とは対

極の位置にあるその感情だからこそ「嫌」だと思った。
辛い記憶が脳裏を掠める。
恋愛なんてもう十分だと思う。思い出すことすら辛い、散々な記憶。暫くは要らない、そう思っていた。
確かに、聡は気になる存在であった。初めて出会ったときから、その穏やかな物腰に惹かれていなかったと言えば嘘になる。
けれどここは見知らぬ土地で。夏美はただの旅行者にすぎない。何より、出会ったばかりの相手を簡単に信じられるはずもない。
悪い人間ではなかった。だが、それは今までの話だ。彼の本質がどこにあるかなど、出会って間もない夏美に知る術はない。
だから、深入りは禁物だと言い聞かせていたのだが。
「景色がキレイなところがあるんだ」
そう誘われて、乗ってしまう自分がいる。
ばかだな、と夏美は自嘲気味に笑った。
信じていい相手かもわからないのに。
理性が諦めたように忠告を寄越す。簡単に心を許してはいけない、と。
それでも夏美にはわかっていた。いくら頭でわかっていても、止められないものはある。危険かもしれないと思っていても、どうしても手を伸ばしたくなる瞬間があるのだ。
階段を下りて顔を上げると、玄関先に白いTシャツが見えた。
心がふわりと揺れる。
「すみません、お待たせしました」
近寄って声をかけると、振り向いた相手が笑って首を振った。
「じゃあ行こうか」
穏やかな、優しい笑み。訳もなく夏美は安堵する。
彼のこの表情は、好きだと思う。ささくれて刺々しくなっていた自分の感覚が、正常に戻る気がする。
聡の家を後にし、並んで歩く。
目の前には田舎としか表現しようのない、田園風景が広がってい

る。
青々とした稲の海。
その間を涼しい風が吹きぬけていく。夏が、さわさわと囁いて夏美の頬を撫でていく。
「おうい、聡」
遠くからそう、声をかけられた。
聡は特別歩みを止めるわけでもなく、声のした方向を見遣って軽く手を上げた。
「どこへ行くんだね」
青々とした稲の向こうから、麦藁帽子が揺れている。顔は良く見えないが、あちらからは丸見えのようだ。
「山だよ、あの見晴らしの岩。案内しようと思ってさ」
「おお、そりゃいい。気を付けるんだよ」
相手は朗らかに笑って、稲の向こうから手を振る。
それに手を振り返して、聡は足を進めた。
「見晴らしの岩って？」
暫くして、夏美は隣を歩く聡に尋ねる。
「あの山の中腹にあるんだ。大きな岩でさ、そこに立つとこの辺り一帯が見渡せる。大丈夫、ここからそんなに遠くないし、険しくもないから」
聡が指差す先には、何の変哲もない山が聳えている。
夏美が見る限り、それらしい岩もないように見えるが、地元の人間がそういうのだから間違いなくあるのだろう。
聡の提案で、村の中心を流れる川に沿って歩く事にした。
次第に幅を狭くし、表情をころころ変える川の様子に、夏美は目を奪われる。都会で育った夏美にとって、それはどれも新鮮で初めてみるものばかりだった。
水辺に群生する、丈長い草。葦、という名だと聡から聞いた。生い茂る草花が水辺に垂れ、まるで短冊のように水面をひらひらと揺れている。陽光は水面で美しく乱反射し、浅瀬に金色の網目を描い

ていく。その下を幾つもの小魚の影が揺れ、水底の小石に影絵を作った。
見つめている夏美の前で、何かがぴしゃりと跳ねた。
驚いて思わず声を上げると、前を行く聡が振り返る。
「どうかした？」
「今、何か跳ねた……大きいのが」
やや興奮気味な夏美を、聡は面白そうにみつめて、
「ああ、鯉じゃないかな。よく釣れるよ」
笑いながらそう答える。
「鯉？　聡さん、釣りを？」
「俺じゃなくてガキ共だよ。保護者代わりに引っ張り出されて困りものでね」
「可愛がっているんですね」
「まさか。仕方なしだよ」
言いながらも、苦笑いする表情は優しい。きっといい兄貴分なのだろう。その光景が目に浮かぶようで、夏美は微笑ましい気持ちになる。
「さぁついた」
話しているうちに、目的地にたどり着いたらしい。
なるほど、目の前には巨大な岩がある。黒っぽい岩肌は苔むし、大部分を蔦や下草に覆われて、一見するとただの茂みのようにもみえる。
「ここが、見晴らしの岩……」
見上げていると、聡がひょいと岩によじのぼった。
「夏美さんも」
ほら、と手を差し出されて、夏美はおずおずと手を伸ばす。
「ありがとうございます」
礼を述べると、聡はにこりと微笑んだ。
助けられてやっとの思いでのぼった岩の上は、想像以上に視界が広かった。

周囲の木々が岩より少し上くらいの高さまでしか伸びておらず、そこに立つことで周囲より頭ひとつ分ほど飛び出す形になるのだ。遠目でみれば、ちょうど木々の緑の海からぽかりと顔を出しように見えるだろう。

頭上に広がるのは、高く青い空。

深い山々にかかる白い雲は幻想的に美しく、その下方に見える村とあいまって、一幅の絵のように見える。まるで古い昔話にでてきそうな、そんな懐かしい風景。

「わぁ…すごい」

思わず感嘆の声を上げると、聡は得意げに胸をそらす。

「きれいだろ」

「すごく綺麗。昔話の世界みたい」

「ああ、田舎だからね」

「あ、悪い意味じゃなくて……」

慌てて言葉を継ぐ夏美に、聡は笑いながら首を振る。

「わかってるよ。俺も最初は思ったんだ。現実とは思えないくらいキレイで田舎だなって」

その言葉に安堵しつつも少しひっかかって、夏美は首を傾げた。

「最初？」

「あ、ああ、ここに最初に登った時。それより、どう？　気に入ってくれた？」

慌てた様子が気になったが、大したことないと言い聞かせ、夏美は頷く。

「いい所ですね。こんなことならカメラを持ってくるんだったなあ」

「じゃあさ、いっそ移住しておいでよ」

軽い口調で聡が言う。

「そうですね。でも、そんなことしたら通勤が大変」

冗談と受け取って、夏美も軽い口調で返した。

「ああ、それじゃあ無理だな。でも来てくれたら嬉しいのに。……夏美さんが近くにいてくれたら、毎日楽しいだろうな」

ふと、その眼差しに真剣なものを感じて、思わずどきりとする。
「……そう、ですね。きっと楽しいでしょうね」
曖昧に返すのが精一杯だった。心臓がうるさく騒いでいる。覚えのある甘い感覚に、ふと酔いそうになる。
過剰な期待をしてはいけないとわかってはいたが、反応してしまうのは夏美自身どうにも止めようがない。高鳴る鼓動に、頬がうっすら熱くなる。紅潮した顔を見られたくなくて視線を外すと、ポケットから飛び出した携帯のストラップが目に入った。
そうだ、時間。
現実に引き戻される。余韻に浸っていたいが、そうも言っていられない。夏美は帰らねばならないのだ。
表示を見ると、バスの時間が迫ってきている。
「聡さん、その」
折角の楽しい雰囲気を壊すことは躊躇われた。もっとこの時間を、と願う気持ちもある。しかし、このバスで戻らねばタクシーを呼ぶ羽目になってしまう。運賃の額を想像するとさすがにそれは避けたかった。
「そっか……」
聡はそう言って岩から降りる。その笑顔が少し残念そうに見えるのは、夏美の気のせいだけではないようだった。
聡に再び手を借りて、夏美も岩から降りる。
触れた手のひらが、少し冷たい。
川沿いに並んで戻りながら、夏美はなんとも言えない寂しさを感じていた。昨日出会ったばかりの相手。ただ一晩屋根を借りただけの、知人とも呼べない間柄だ。
それなのに、夏美の中には親しみが生まれていた。まるで長年の親友のような。幼馴染のような。
もしくは、恋心のような。
だめ。
夏美は首を振る。

だめだ、こんなことといけない。
数年前の出来事が脳裏をよぎる。
社会人になったばかりの頃、夏美も人並みに恋をした。相手は会社の同僚。仕事ができて優しい人だった。初めての恋に、有頂天だったことを覚えている。
けれど、結局彼は夏美の元を去り、別の女性と結婚した。
夏美の、親友だった女性と。
苦い記憶。
もう恋愛は懲り懲りだと思った。あんな思いはもう沢山だと。傷が完全に癒えるまでは、恋はしないと決めていた。
だから、万一、聡にそのつもりがあったとしても、夏美には応えることはできない。まして、聡は昨日出会ったばかりの相手。結論を出すには性急に過ぎる。
そんなことを考えている自分が、ふと恥ずかしくなった。
聡は何も言っていない。あくまでも自分の勝手な想像だ。聡には聡の事情があるだろう、恋人だっているかもしれない。ただ冗談を言っただけかもしれないのに。
なんてばかな。
自覚すると余計に恥ずかしくなり、足元に視線を落とした。
丈長い雑草をかき分けて進む。草を踏む音。靴の下で折れる茎、朽ちた葉の音が、やけに耳につく。行きは物珍しさと話に夢中で気にならなかったのだろう。そう考えて、夏美は先ほどから無言のままだということに気付いた。
夏美に歩調を合わせてくれている聡は、それに気付いているのかいないのか、表情に僅かな緊張を滲ませて足を進めている。
「どうしても……」
暫く歩いて、ぽつりと聡が呟いた。
「どうしても、今日帰らなきゃダメかな」
「え……」
思わず足が止まる。

帰らなきゃいけない。それは当然のことなのに迷う。ぐらぐらと揺れてしまう。
「あと一日ここにいなよ。見て欲しいところがまだあるし……うちにもう一泊すればいい」
「でもそれじゃ迷惑が」
「大丈夫だよ、どうせ部屋は余ってるんだ。母さんだって賑やかな方が喜ぶ」
どうかな、と促されて、夏美の気持ちは揺れた。
帰りたい気持ちはある。見知らぬ土地で、成り行き任せになっている現状は不安だった。いわばこの状況は事故と同じなのだ。予定外のことが連続して、実家に連絡すらしていない。
だがそれ以上に、もう少しここにと思う気持ちが強い。これまで訪れたどこよりも、居心地がよかった。
そう思ってしまうと、気持ちは急速に傾いていく。
元々旅行も兼ねて休暇を取っている。急いで帰る用事もなく、急いで家に帰りたい理由があるわけでもない。
気付けば懸命に理由を考えている自分がいる。ここに残る理由。少しでも長く留まる理由。
「……なら、あと一日だけ」
思わず口をついて出た言葉。
聡がぱっと顔を輝かせる。その表情を見ただけで、夏美の不安は掻き消えた。自分の判断は正しいのだと、意味もなく信じることが出来た。
聡と並んで川辺を歩きながら、夏美は胸の中で繰り返した。
あと一日、あと一日だけだから。

聡の言葉どおり、百合江はとても喜んだ。
「まぁよかった。お隣から山菜をたくさん頂いたのよ」
今夜も奮発しなきゃ、といそいそと台所に消える姿からは、迷惑

がっている様子はみられなかった。
夏美は聡と顔を見合わせ、そっと微笑み合った。
そうして食卓に並べられた料理は、山菜をふんだんに使った郷土料理風のもの。
煮物にてんぷら、おひたし、お吸い物。
どれも素朴な味ながら、美味しかった。
「何なら、このままずっといてくれてもいいんですよ、ねぇ聡」
夕飯の後、さりげなく投げられた爆弾に、思わず夏美はお茶を吹きそうになった。
「ばか言うなよ」
同じくお茶を吹きそうになったらしい聡が、力いっぱい反論する。
夏美は内心その通りだと思いつつも、力いっぱいの否定をされたら…それはそれで微妙な気持ちになった。
「まったく、夏美さんの迷惑も考えなよ」
呆れた口調で言う聡に、百合江は笑って、
「あら、聡ったら『夏美さん』って。幼馴染も名前で呼べない癖に……ちゃっかりしてること」
意味ありげに含み笑いをする。
その言葉に、夏美は驚きを隠せない。
今朝のやり取りが脳裏に蘇る。随分あっさりと夏美の名を呼んだ。その様子にてっきりそういうことに慣れているものかと思っていたのだが。
意外な気持ちで聡を見遣ると、目が合った途端に聡はぱっと視線を外した。その頬がうっすらと赤く見えるのは気のせいではないだろう。
「うるさいな、関係ないだろ。……俺、先に寝るから」
一方的に会話を打ち切って、聡は席を立つ。
どたどたと騒々しい足音を立てて、聡は部屋を後にした。
「ごめんなさいね、うるさい子で」
その足音が遠ざかり、百合江が笑いながら夏美に言った。

「いえ」
苦笑しつつ返す。仲の良い親子だな、と思う。
「でもね、夏美さん。勿論半分は冗談だけど、半分は本気なんですよ」
「え」
「あの子には、父親がいないことで随分苦労させてきました。母さん一人で十分、と言ってはくれますが…本心では父親を求めてることも、『ちゃんとした』家族を求めていることもわかっています」
どきりとした。
夏美にもそれは覚えのある感覚だったから。
父親はいなくてもいい。そう母親に言い続けていた。それは偽らざる夏美の本心だったが、父親がいてくれれば、と思ったことも一度や二度ではなかった。
母には決して気付かれてはいけない。父がいないことが悲しいなどとは、決して悟られてはいけない。
だが、母はやはり気付いていたのだろうか。
目の前の百合江が、母親の面影と重なる。
「だからあの子が、早く『家族』が欲しいというなら、望むようにしてあげたい。聡がこの人と決めた相手なら、どんな相手であれ」
遠くを見る目で百合江は呟いて、思い出したように急須を取った。
「でもね、母親の希望としては夏美さんみたいなしっかりしたお嬢さんがいいんですけどねぇ。恋人がおいでないなら候補に入れてあげてくださいな」
茶化して笑い、百合江は立ち上がる。
「そうそうお茶菓子にって、お饅頭頂いたんですよ。お茶、淹れなおしましょうね」
「あ、お構いなく」
慌てて夏美は申し出るが、百合江はさっさと台所へと消えて行った。衣擦れの音が遠ざかる。
一人残された夏美は、考えるともなしに考える。

母もこうして、娘のことを考えたのだろうか。夏美が何を思い悩んでいるのか、胸を痛めてくれたのだろうか。
百合江の、優しげな瞳が蘇る。
そうであったら。そうと知ることが出来たら。
お前さえ、と恨むような掠れ声が、耳の奥に残っている。
ふと、母に逢いたくなった。
この四年、一度として恋しく思ったことはなかった。母が結婚するなどと言い出さねば、戻るのは何年先になるかわからなかっただろう。
ぎくしゃくとした関係に疲れていたし、ろくでもない男に泣かされてばかりの母にうんざりもしていた。
だが、意地があったのも確かだ。一人でも生きていけると、母とは違うのだと、頑なに思っていた。
その気持ちは今も変わらない。
母に逢えばぎくしゃくもするし、疲労もするだろう。
ただ、母の声が懐かしかった。
恨み節さえも聞きたいと思った。
胸をえぐる言葉を投げられても、それでも母の本音を聞きたいと思った。
父のこと、母のこと。
そして結婚相手のこと。
「帰らなきゃ…」
湯飲みを握り締めたまま、夏美は窓の外を見る。
外には夜の闇が迫っていた。
明日こそは、戻ろう。

参

ごめんね、夏美。
泣いているのは、親友だ。長い睫に、涙が朝露のように溜まっている。
黙って、手元の珈琲カップを見つめた。茶色の鏡に映るのは、表情のない、女の顔。
こんなつもりじゃなかったの。
目の前で、親友は懸命に舌を動かしている。大きな瞳からぼろぼろと涙を零しながら。
どうして泣くの。
声に出さず、思う。
泣きたいのは、私の方。
責めるのも、嘆くのも、私のはずじゃないの。
けれど、珈琲カップから見つめ返してくる女からは何の動揺も見られない。
泣き出したくて、喚きたくてたまらないのに。
あの人は私のものだと高らかに宣戦布告をしたいのに。
ごめんな、夏美。
親友の背後に男性が現れる。
見知った姿に、目頭が熱い。
涙が溢れそうになるのを、我慢した。
何もかもを投げ出して彼の袖に縋りたい。
愛してくれと、恥も外聞もなく叫びたい。
それはまるで、哀れな母の姿そのもののようで。男に縋って、愛を求める、あの時の恐ろしい夜叉そのもののようで。
わたしは、違う。
わたしは違うの。
気がつくと、男性の姿は消えていた。少し離れたところに、親友

がぽつんと立っている。こちらに背を向けたままで、何やらぼそぼそと呟いていた。
私が憎いでしょう？
私がねたましいでしょう？
胸の中がざわりと波立った。暗い感情が、体の奥からせり上がってくる。
思わず手を伸ばして、親友の肩を掴んだ。
強く引いたわけでもないのに、親友はくるりと振り向く。その手を、待っていたように。
死ねばいいと、思うでしょう？
真っ赤な唇が、そう紡いだ。
その虚ろな両目からは、赤い涙。
親友の胸が真っ赤に染まっている。
私を殺すのね。
鮮血と共に吐き出された言葉。
落とした視線の先、両手が赤い。右手が握り締めているのはナイフ。鋭利な、その切っ先は赤く濡れていた。

…ちりん。

鈴の音を聞いた気がして、夏美は目を開けた。
動悸が激しい。全身がどくどくと脈打っている。
「…？」
自分が何をしていたか、どこにいるのか、一瞬分からなくなる。
周囲の暗闇を見回して、布団の感触にふっと力が抜けた。
夢を見ていたのだと気付く。
ここには親友はいない。夏美の手も、赤く濡れてなどいない。
あれは、寝苦しさが見せた悪夢だったのだ。
昨夜の記憶が蘇る。
百合江と別れて、入浴の前にと一旦部屋へ引き上げたこと。携帯

電話をいじりながら、どうやらいつの間にか眠ってしまったこと。
畳まれたままの布団に、昼間外出した時の格好のまま、不自然な体勢で眠ってしまった。
それは悪夢もみるだろう。
苦笑して、夏美は重い体を起こす。汗ばんだ首筋に、髪が張り付いている。
鞄を引き寄せてタオルを取り出した。首筋を拭いながら、ふと、静寂に支配された闇の中で微かな気配を感じる。
不思議に思って耳をそばだてると、人の声のような、葉擦れのような、ざわついた気配がある。
立ち上がって廊下を覗き込んだ。闇に沈んだ廊下には、人の気配はない。
ならばどこ、と廊下に取り付けられた窓から中庭を見下ろす。
幸い、今夜は月が明るい。
雲があるのか時折薄く翳りはするが、それでも月明かりで庭の様子はよく見える。
木々や茂みに混ざって、華奢な人影が見えた。白っぽい服はどこかの制服のようだ。長い髪を垂らした、恐らくは学生と思われる少女。
百合江の言葉が蘇る。
『離れに、親戚の子を預かっている』
見れば確かに、少女は離れに近い位置に佇んでいた。
あんなところで何をしているんだろう、と思う。
しかもこんな時間だ。
いくら真夏で寝苦しい暑さとはいえ、涼みに出るにはあまりにも不自然に思えた。不気味なものを感じて、夏美は見なかったことにしようと結論付ける。
だが部屋に戻ると、やはり気になってきた。
学生で、預けられた理由ありの少女。
もし、この後あの少女が行方不明にでもなってしまったら？　果

たして自分は後悔しないだろうか。せめて一言、声をかけておくんだったと。或いは百合江に知らせておけばよかったと。
畳に座りこんだまま暫く考えて、腹を括る。
やはり、大人としてはこのまま見過ごすのは良くない。一言声をかけて、部屋に戻る素振りがなければ百合江に知らせるとしよう。
決心して立ち上がる。立ち上がりしなに、膝が鞄に当たった。
ちりん、と鈴の音が響いて、はっとする。
脳裏に先ほどの悪夢が蘇る。同時に、響いた鈴の音。
ストラップを持っていこうと思った。
何故そう思ったのかはわからない。何の脈絡も確たる理由もなく、そうしなければいけない気がしたのだ。夏美自身、その不自然な思考を少しも疑わなかった。
ストラップを手早く鞄から取り外すと、そのままジャケットのポケットに突っ込んだ。鈴はポケットの中でちりちり、と潰れた音を奏でる。そういえば壊れてしまっていたのだと思い出し、夏美は首を傾げた。
けれど確かに、先ほどは鳴っていたのだ。その前もきちんと鳴っていた気がしたのに。ちょっとした金具の具合かしら、とあまり気にせず、夏美は廊下に出た。
暗い階段をそろそろと下りる。ぐっすり眠っているであろう、百合江と聡を起こしたくはなかった。
一階は闇に沈んでいた。
物音ひとつしない所をみると、百合江も聡も寝入っているようだ。
夏美はそっと廊下を移動し、中庭に通じる廊下に出る。
ガラス越しに見遣ると、少女はまだ佇んだままだった。何をする風でもなく、ぼんやりと庭木を見ている。白地に濃い色のセーラーの襟。同色のプリーツスカートを、夜風にひらひらと揺らしている。
「あの……」
ガラス戸を開けて、縁側から外へと踏み出しながら、夏美はそっと声をかけた。

少女は振り向きもしない。
寝静まった夜とはいえ、夏美の場所からは少し距離がある。聞こえなかったのだろうと踏んで、夏美は縁側に揃えてあったサンダルをひっかけた。
湿った土を踏みながら、極力刺激しないよう近づく。
「ねえ、何してるの？」
近寄り、尋ねるが反応はない。
「夜は冷えるよ。風邪ひく前に中に入ろう？」
肩に何かかけてあげればよかったろうか、とちらりと考えて、すぐに打ち消した。こちらに背を向けたその様子が、先ほどの悪夢と重なり、少女に触れるのが躊躇われたのだ。
「部屋に戻った方がいいよ」
夏美に背を向けたままの少女が、その言葉に少し反応を見せた。
「戻る……」
鸚鵡返しに、細い声が繰り返した。
「え、ええそうよ。部屋に戻った方が」
緩慢な仕草で少女が振り向く。
心臓が跳ねる。
その双眸は虚ろだった。
長い髪が、幼い顔に張り付いている。顔には血の気がなく、その白い肌は瞳の無表情さと相まって、まるで人形のよう。
色のない唇が、ぽつりと呟く。
「戻りたい」
声はひび割れて夏美の耳に届いた。
「戻りたい、疲れたの……」
たどたどしい言葉。
わけもなく不安に駆られて、夏美は慌てて唇を動かす。
「そうね、早く部屋に戻った方がいいわ」
さあ、と離れを指差すと、少女の虚ろな視線がその先を追った。
一応、こちらの言葉は届いているらしい。

それに安堵しつつ、夏美は更に少女を促した。
「疲れて……疲れて、わたし」
けれどその場を動くことなく、少女はぼそぼそと呟いている。それは夏美に語りかけているというよりは、独り言めいていた。
よく見ると、白地の制服に茶色のシミがある。
液体が飛び散ったような小さなシミ。それが服のそこかしこにあるのが夜目にもわかった。
何のシミだろう、と疑問に思うより先に、夏美の脳裏に『血痕』という単語が浮かんだ。
慌てて夏美は己の想像を否定する。嫌な想像だ。先ほどの悪夢の名残だろう。何かの染料をこぼしただけかもしれないのに。
そう考えつつも、少女の体をまじまじと見る。先ほどまでは気付かなかったセーラーの襟に、プリーツの裾に、同じようなシミがある。その範囲は広く、しかも僅かに色みを帯びて見えた。
月明かりに照らされ、青ざめた色。けれどそれは確かに赤い色をしていた。
まだ、乾ききらないその色。
息を詰めて、夏美は硬直する。
少女の服には、血が付着している。
悪夢が頭を掠めた。叫びたい衝動と、恐慌に陥りそうな心を必死に宥めて、夏美は口を開く。
「……怪我してるの？」
自分でも驚くほど、静かな声が出た。
よくみれば、制服のあちこちに血が滲んでいる。けれど、目だった傷口がない。きっと、指先か腕か、庭木にでもひっかけたのかもしれない。
そう自分を納得させて、夏美は少女をくまなく観察した。
その合間も、少女は何やら呟いていた。その内容は、およそ夏美の問いに対するものではない。どこか常軌を逸した響きを帯びた、独り言だ。

「わたし、切ったの……でも、苦しさはなくならなくて」
手当てをして、早く百合江に知らせよう。
先ほどの悪夢も手伝って、夏美には少女が薄気味悪くて仕方なかった。少し神経質、ということは聞いていたが、血を流したまま独り言を言い続けている相手にどう対処しようもない。
「切ったの？　どこ？」
だから、少女が漏らした傷口に関係しそうな単語に、夏美は問いを重ねた。まともな返答を期待せずに。
「楽になりたくて、切ったの……ここを」
茫洋とした口調で少女が呟く。
ぼたり、と赤い色彩が夏美の目の前に散った。
闇の中に咲く、真紅の彩り。
こちらを仰ぐ少女。
その喉元が真っ赤だ。
鮮烈な、赤。
目の前の光景がうまく処理できなくて、夏美はただ硬直したまま立ち竦む。瞬きも忘れて、夏美は少女に釘付けになっていた。
先ほどまで白い肌を晒していた喉元が、赤い色で染まっている。滑らかだったそこに一筋の深い傷が、ぱくりと口をあけていた、
夏美の背筋を冷たい汗が流れる。
口の中がからからに乾いて声が出ない。
止血をせねば、と夏美の理性が訴える。このままでは命の危険がある。止血をして、救急車を呼ばねば。否その前に百合江に。
そう訴えかける理性とは裏腹に、夏美は指一本動かせずにいた。
少女は笑っている。
喉元から鮮血を滴らせ、笑っている。
人形めいた血の気のない青白い顔に、薄い笑みを貼り付けて。
鮮血の溢れる傷を押さえることすらせず、少しも痛みを感じさせない表情で佇んでいる。虚ろな双眸に、怯えた表情の女が映りこんでいた。あれは、夏美の顔だ。

これは、一体なに。
かちかちという音が、己の歯の根が合わない音なのだと、気付く。
帰らなきゃ。
胸の中に湧き上がったのは、そんな思い。
「夏美さん？」
不意に、背後から声がした。
硬直した首を無理やり動かし、振り向く。
そこには綺麗に髪を結い上げた、浴衣姿の百合江が佇んでいる。
「……百合江さん！」
助かった、とばかりに夏美は声を上げた。
「百合江さん、救急車を！」
逃げ出したい衝動と必死に戦いながら、辛うじて残った理性が夏美にそう叫ばせた。恐怖で震える体を抑えて、夏美は百合江に縋らんばかりの勢いで言う。
けれど、百合江は困ったように表情を曇らせる。
「こちらの離れはご遠慮してくださるよう、お願いした筈ですけれど……」
百合江はほっそりした頬に手をあて、少し首を傾げた。
「百合江さん！　怪我をしてるの、早く！」
そんな問答をしている場合ではないのに、と夏美は非難の声を上げる。
「彼女は少し心を病んでしまって、他人との交流が得意ではないの」
あまりにも冷静なその姿。まるで、慌てる夏美こそどうかしていると言わんばかりの、その態度。
「だから可哀想に……自分で来てしまったのよ」
夏美の前にいる少女に気付いていないはずはない。この距離と月明かりだ。少女が血を流している事に、気付かないとは思えなかった。
それなのに、どうして冷静なのか。
或いは、自分こそが錯覚をしているのか。

混乱して、夏美は己の感覚を疑う。しかしそれを確かめたくはなかった。少女を顧みて、あの薄い笑みを見出したくはなかった。
「私たちはね、夏美さん。彼女を助けるためにここに連れてきたんです。ここに迷い込んだ彼女を、もっと自由にしてあげるために。でも駄目ね……若すぎて、捕らわれ過ぎてしまっている」
百合江の言っていることは少しも理解できなかった。
けれど、体が勝手に反応する。本能に近い部分で、強烈に拒絶している自分がいた。
「百合江、さん」
がくがくと揺れる膝を滑稽に感じながら、夏美は百合江を見つめた。
「夏美さん、必要ないんですよ」
百合江は優しく微笑む。月光に晒された白い肌、くっきりとした目鼻立ち。
綺麗だった。この世のものとは思えない程に。
「救急車なんてものは、もう要らないんです」
背筋が凍った。
「大丈夫、さぁ、こちらへ」
差し出された、百合江の手。
細くて綺麗な指。
月光に照らされた白い、白すぎる、手。
百合江は笑っている。
紅を履かない唇が、不思議と赤い。
まるで、血のように。
「いや！」
百合江の手を振り払い、夏美は駆け出す。
大きく百合江を避けて、中庭からまろび出る。一瞬振り返ると、庭に佇む二人が見えた。
百合江は完全に表情を失して、夏美を見つめていた。その向こうに佇む少女は首から下を赤く染めて、薄く笑みを浮かべている。

戦慄する。
おかしい。
何もかもが、おかしい。
夏美は足をもつれさせながら、必死に走る。
逃げなければ。
一刻も早く、ここから逃げなくては。
その思いに突き動かされて、夏美は走った。
玄関を抜けて、外へ。

夜空にはぼんやりとした月がひとつ。

四（前書き）

最終話です。

四

村のただなかを、夏美は必死で走った。
止まることはできなかった。
背後を振り返ることすらできずにいた。追ってくる百合江を目にしてしまったら、自分がどうにかなってしまいそうだった。
中心部からだいぶ離れ、雑木林が目立つ斜面にたどり着いた頃、夏美はようやく背後を振り返った。
荒い呼吸を繰り返しながら、百合江のいた家を探す。
村は闇の中に沈んでいた。ひっそりと、変わらず穏やかな風景が広がっている。夏美が目にしたものはまるで夢だったかのような、そんな錯覚すら覚える。
百合江の姿も、追ってくる様子もない。
少し落ち着いてきて、夏美は首の汗を拭う。
すると、百合江の家の玄関口にぽつりと人影が出てきた。
夏美は慌てて近くの茂みに体を隠し、息をひそめた。呑気に見つめている場合ではないことはよくわかっていたが、確認せずに走るのも怖かった。
人影はあまり急ぐ様子もなく、ふらふらと頼りない風情で通りを歩いてくる。その細いシルエットからはよくわからないが、おそらく百合江だろう。
やがて、近くの民家の明かりが付いた。その玄関口に人影が現れる。そうこうしているうちに、遠くの家までぽつぽつと明かりがつき始めた。まるで呼びかけているかのように、次々と通りに人影が現れる。
けれど夏美の耳に届くのは静寂ばかり。風の音と葉擦れの音。
息を押し殺して夏美が見守る前で、人影はぞろぞろと通りを歩いてくる。こんなに大勢の人間が住んでいたのかと驚くほどの人数だ。彼らは皆、一様に無言だった。ただ黙々と歩いている。

夏美の後を追うように。
背筋に悪感が走った。
震える手足を叱咤して、夏美はそろそろと茂みの中を移動した。
大きな音を立てるのは怖かった。もし見つかったらと思うと、恐怖で発狂しそうだった。
夏美は人々の影を横目に、道なき道を移動する。
月光にうっすらと浮かぶ夏草。かさかさと騒ぐそれにいちいち怯えながら、雑木林を奥へ奥へと進む。
どこをどう進んでいるのか、方向感覚はなくなっていた。ただあの人影から逃れたい。その一心だった。
周囲を見渡すと、上方に薄く白い線が見えた。ガードレールだと思い至る。それならばトンネルがある。そこから町に戻れる。
白いガードレールの線を目指して、夏美は茂みを急いだ。枝葉が顔に当たるのも構わず、茂みを掻きわけて進む。
茂みを抜け、斜面を這うように登って、アスファルトの道路に出た。
人工のその路面に、訳もなく安堵した。
やっとの思いで道路に踏み出し、夏美はぎくりと足をとめた。
闇の中にぽつんと浮かぶ人影。
真っ白なTシャツが、目を引く。
月光に照らされて、足元に長い影が伸びていた。
「どうしたの？」
「……聡さん」
肩で息をしながら、そう呟くのがやっと。
「すごい汗だ。顔色もよくないし……こんな夜中に一体どうしたんだよ。とりあえず戻ろう」
駆け寄ってきた聡は、言って心配そうに覗きこんできた。普段と変わらないその様子に、僅かに夏美は安堵する。
「あ……私」
どこから説明をすべきか迷った。

中庭の血まみれの少女。
百合江の白い顔。赤い唇。
思い出して、恐怖が蘇る。
「いや！」
伸ばされた聡の手を咄嗟に振り払って、夏美は後退った。
聡が驚きに目を瞠る。
「夏美さん？」
「私……私、帰らなきゃ」
目の前の聡は、夏美の目にも普段と変わりなく映った。恐ろしげな様子も、不安を掻きたてられる要素もない。ただ、突然の夏美の反応に驚いている、そんな風に見えた。
「帰る？　そうは言ってもなぁ……こんな夜中にバスは通らないし」
「歩いて帰る……そこ、どいて」
聡の背後にはトンネルがある。
夏美がここに来るときに、バスで通過したトンネルだ。そのトンネルを抜けて歩き続ければ、町にたどり着くはずだ。
けれど、夏美には聡を避けてそのトンネルを目指す勇気はなかった。
別段、聡がトンネルの入口に門番のごとく構えているわけではない。聡はただ、夏美の向かい側にいる。それがたまたまトンネル側だったというだけに過ぎない。
「聡さん、お願い、どいて」
手足が無意識に震える。その震えの意味も、胸に渦巻く不安の意味もよくわからない。
夏美の懇願に、聡は困惑気味に首を傾げた。
「どくのはいいけれど……歩いて帰るなんて危険だ。夜中だよ、何があったの？」
心配そうに尋ねるそれに、答えようと口を開きかけて、夏美ははたと気付く。
「聡さんこそ。どうしてここに」

彼の言うような夜中に、一体何をしているのか。
寝静まった家を夏美は飛び出してきた。当然、聡はまだ家の中にいるはずだった。それが夏美よりも先にこの場にいる。
「何をしていたの」
尋ねる声が震えている。
聡は答えない。黙って、夏美の真意を計るように見つめている。
永遠にも感じられる沈黙のあと、聡が溜息とともに呟いた。
「夏美さんを止めにきたんだよ」
じゃり、と小石を踏んで、聡が夏美に近寄る。
夏美は気圧されるように一歩下がった。
「本当に、帰るつもりなの？」
夏美は頷く。
帰りたかった。一刻も早く、ここから逃げたかった。
「戻るの？　あそこに、居場所があるの？」
鼓動が跳ねる。
居場所。
耳に電話越しの母の声が蘇る。
『結婚するから』
「もう彼女はしあわせなんだよ、夏美さんなしでも」
その通りかもしれない。
母は、幸せになれる。
夏美のために犠牲にした時間を、これから埋め合わせていく。ならばその人生に、自分が現れることは既に邪魔でしかないのではないだろうか。
電話が来てからずっと、密かに繰り返してきた問答。
母の結婚相手の前に自分が現れることは、母にとってマイナスでしかないのではないか。もう何年と顔をあわせていない娘。今頃、会う理由はどこにあるのか。
お前さえと疎む母の声が耳に蘇り、夏美は体を震わせる。母の夜叉の表情が、網膜に焼き付いて離れない。

「辛いことが待ってる。今までも、そうだっただろう」
小石を踏んで、聡が近づく。
その両目を呆然と見つめて、夏美は立ち尽くす。
「いままで……」
「恋人は親友の元に。何年も会っていない母親と、顔も思い出せない父親。その母親も結婚する」
君は、ひとりだ。
そっと聡が囁いた。
すうっと血の気が引いていく。
誰も自分にはいない。
ただひとり。
ならば自分はどこに帰るのだろう。
ぐらぐらと足元が揺れる。
恐怖と不安で、夏美は余裕をなくしていた。
でなければ、話したことのない夏美の事情をすらすらと口にする聡に、疑念を抱いた筈だ。怪訝に思い、警戒しただろう。けれど、このときの夏美にはそれに気付くだけの余裕がなかった。
突きつけられた現実に、ただひたすらに怯えていたのだ。
「ここにいよう、夏美さん」
間近で聡が言う。優しく、穏やかに。
「俺と一緒に帰ろう。大丈夫だよ、ここなら辛いことも怖いものも、何ひとつない。寂しい思いなんてさせないよ」
差し出された優しい手に、縋りつきたい衝動に駆られる。
このまま聡と帰れば、色々な苦しみから解放される気がした。
そうだ。帰ろう。
夏美はよく回らない思考で繰り返す。
帰ろう。きっと怖いものは何もない。帰るんだ、あの場所に。
聡の吸いこまれそうな双眸を見つめたまま、夏美は無意識に手を伸ばす。
ちりり。

不意に、微かな鈴の音がした。
くぐもった、鈴の音。
冷たい風が夏美の頬を撫で、視界が開けた。
手を伸ばしかけた不自然な体制で、夏美は動きを止める。
違う。
これは、違う。
ここは、おかしい。
「夏美さん……」
我に返って、呼びかける聡を見る。
歪んでいる、と感じた。
見た目が、ではない。その姿は普段どおりの聡であり、どこにもおかしな点は見受けられない。けれど、夏美の感覚が違和感を訴えていた。
感覚で夏美は理解する。
ここにはいられない。
「だめ……」
首を振る。
聡が訝しげに夏美を見た。
「やっぱり駄目、ここにはいられない」
「どうして」
「だって……」
ここは何かがおかしい。
歪んだ、閉じられた世界。
「そこにいるの？」
突然、闇の中に第三者の声が響いた。細く、語尾が僅かに反響している。
夏美は体を強張らせ、声の方向に視線を転じた。斜面の下方から複数の人の気配がする。あの声は、百合江のものだ。
途端に記憶が蘇り、全身に震えが走った。
鮮やかな赤。鮮血に染まる制服。赤い唇。

真紅の、凄惨な光景。
「いや……！」
捕まる、という恐怖で、夏美の思考は埋め尽くされる。
聡の存在など忘れて、トンネルの方向へ駆け出した。
その先が安全な保証などどこにもなかったが、何より百合江が怖くてたまらなかった。
その肩を聡が掴んだ。
はっと振り仰ぐと、真剣な眼差しとぶつかる。
「だめだ」
「放して！」
下から声が上がってくる。百合江が、くる。
聡から視線を外して、斜面を見つめる。木々や草の黒々としたシルエットが揺れる。人の気配がすぐそこに感じられる。
「怖い！お願い放して！」
「駄目だ……」
消え入りそうな弱い声とは対照的に、肩を掴む力は強い。締め付けられる激痛に夏美は一層もがいて、再び聡を見上げ、
息を呑んだ。
闇。
聡の目の中に、光がなかった。
月光を鈍く反射する、闇そのものの眼。
井戸の底を覗きこんでいるような、暗い眼窩（うろ）。
「行かないで……」
かさかさに乾いた声が唇から漏れる。風の音のような、囁き。
紙のように白い顔からは表情と言う表情がすべて抜け落ちていた。
まるで、離れで見た少女のように。
背筋を冷たいものが這いあがった。
生きていない。
胸に落ちた自分の呟きに、慄然とする。
そうだ、生きていない。

これは、生き物じゃない。
「いや！」
渾身の力で振り払った。
弾みでポケットからストラップが飛び出し、地面に転がる。
ちりん。

潰れたはずの鈴が、涼やかな音を立てた。
聡が数歩、後ろによろめく。
顔を覆い、急な眩暈にでも襲われたようなその頼りない姿に、夏美は冷静さを取り戻した。
「……あ」
胸に罪悪感がこみ上げてきて、夏美は棒立ちになる。
背中を向けて走り出せば、トンネルはすぐそこだ。
姿はまだ見えないが、前方からは百合江や、村人たちが迫っている。
ありありと思い出される、離れでの光景。
怖くてたまらなかった。恐怖で手足の震えがとまらない。
聡もまた、何かがおかしい。
聡の様子にそれを確信した。だがそれでも踏み出せずにいた。
心のどこかで、聡は違うのだと、あれは見間違いだと信じたい気持ちがあった。
「そうか……帰りたいんだね」
聡は片手で顔を覆ったまま、ぽつりと呟いた。
「ご、ごめんなさい、怪我は」
「怪我なんかしないよ」
自嘲気味に笑って、聡は顔を上げた。
その両目には、穏やかな光がある。
内心、再びあの闇の色を見出したら、と戦慄していた夏美はほっと安堵の息を付く。きっとあれは何かの見間違いだったのだ。否、

そうであってほしい。
「俺は……俺たちは、怪我なんてしないんだよ……もう」
聡は奇妙な言い回しをして、背後を一瞥する。
「居場所がないまま生きていくことは辛いよ。
戻ったらまた走りださなきゃいけない。辛くても悲しくても、立ち止まることはできない……その覚悟はある？」
「覚悟……」
夏美はぼんやりと繰り返す。聡の言っていることは、夏美には半分も理解できなかった。ただ聡が真剣に話していることだけはわかる。
「そう、覚悟。戻るなら、また同じ……いやそれ以上の辛い現実が待っている。逃げないでいられる覚悟はあるかい？」
辛い現実。
その言葉に幾つかの映像が閃いた。確かに、戻れば辛い現実が待っている。居場所が曖昧なまま、傷口を癒す暇もないだろう。
そう考えると気分が塞いだ。けれど、帰りたいと思う気持ちは変わらない。どれだけ辛くてもきつくても、帰りたかった。母に逢いたいと思った。
夏美が戸惑いながらも頷くと、聡は寂しげに笑った。
「そうか……じゃあ仕方ないね」
背を屈めて、聡は地面に転がったストラップを拾った。潰れた鈴が、ちり、とくぐもった音を立てる。
「俺たちはね、走ることをやめたんだ。ここにいることを決めた。でも、間違いだったのかもしれない。留まっていると苦しくてたまらないんだ。……寂しさに耐えられなくなる」
「聡さん」
「これ、手作りだね」
ストラップを夏美の前に差し出した。
それをそっと受け取って、夏美は頷く。
「そう……母さんの」

「……そうか」
言って、聡は静かに笑った。今まで夏美に向けられた笑顔の、どんな時よりも優しい笑みだった。
「大丈夫、居場所はあるよ」
ストラップを握り締めた夏美の手を指差し、そしてトンネルの向こうを指差した。
居場所。
手の中で、ストラップがほんのり暖かい。
母は、自分を待っていてくれるだろうか。
「君の居場所はちゃんとある……鈴が鳴ったんだから」
「え？」
聡の言葉に思わず夏美は目を瞠る。しかし聡はそれに微笑で応えて、トンネルの先に視線を向けた。
「トンネルを抜けるまで、振り返ったら駄目だ。まっすぐただ前だけを見て」
「聡さん」
何を言おうとしているのかわからないまま、口を開く。
聡は、わかっている、というように頷いて、笑った。
「夏美さんと逢えて楽しかった。でも、もう二度とここに来ないで。……さよなら、夏美さん」
夏美の肩を軽く押して、聡は手を振る。
夏美は首だけでそんな聡を見つめた。
早く帰りたいと逸る心とは裏腹に、後ろ髪をひかれる思いがする。
ゆっくりとトンネルの入口に踏み出した。
トンネルの中は薄暗い。等間隔で、ぼんやりとしたオレンジ色の明かりがあるだけだ。
足を進めると、背中に幾つもの視線を感じた。重く、息苦しい視線。羨むように呪うように、夏美に絡み付いてくる。
後ろを見ろ。振り向け。ここに戻れ。
暴力的なまでに強く訴える視線を、懸命に無視する。気を抜けば、

恐怖心ごと囚われてしまいそうだ。　夏美は必死に重い足を動かして進んだ。トンネルを進むにつれ、絡み付く視線の圧力は弱まっていくようだった。

そして、静かな視線に気付いた。何も訴えてはこない、静かで穏やかな視線。

訳もなく、聡だと思った。

目頭が熱くなった。何故だか無性に悲しかった。

優しい視線が、悲しくてたまらなかった。

聡は夏美の背中を見送っている。きっと、穏やかな微笑を浮かべたまま。寂しさに耐えられなくなる、と零した聡の表情が、脳裏に蘇る。諦めたような悲しげな顔。

聡の言葉を思い出すたび、姿を思い出すたび、涙が溢れた。

怖くてたまらなかったはずなのに、気付けばそれ以上の悲しみで胸がいっぱいだった。

前方に白い明かりが見えた。

トンネルの出口だ。

近づくとそれは大きく、明かりは強くなる。眩しくて、眼を開けていられないほどの強烈な光。出口に立つ頃には、前方は白い光で埋め尽くされていた。

外へと足を踏み出したとき、微かに名を呼ぶ声が聞こえた気がした。

耐え切れずに振り返った。その声はきっと、聡だと感じたから。

真っ白に漂白される世界。白く視界が弾ける一瞬、闇の向こうで小さく手を振る姿が見えた。

花束を抱えて、夏美は車を待っていた。

携帯電話を見て時刻を確認する。

そろそろ来るころだ、と思う。

夏美が生まれ育った町の中心。待ち合わせ場所として名高いブロンズ像の前で、夏美は母を待っていた。
季節は秋から冬に移り変わろうとしている。髪を弄る風は冷たく、足元を枯れた葉がひらひらと転がり過ぎていく。上着の前を掻き合わせ、夏美は携帯電話に再び視線を落とす。
揺れるストラップ。鈴が潰れた、ビーズ製のそれを眺め、夏美は記憶をたどる。
トンネルを抜けた後、気付いたら夏美は病院のベッドの上にいた。
母の心配そうな顔を見出し、酷く驚いたことを覚えている。母は警察から連絡があって飛んできたと言った。
夏美は事故にあったのだと聞かされた。実家に向かう途中、乗り合わせたバスが追突事故にあったのだと。夏美はその事故で意識不明となり、三日間生死の境を彷徨っていたらしい。
とてもではないが、俄かには信じられなかった。
トンネルから出た後か、とも思ったがそれでは母の言うこととつじつまが合わない。そして何より、あの家に置いてきたはずの鞄が夏美のベッドの脇に置いてあった。事故の名残か、あちこち破損した状態で。
夢をみたのだろう、と母は言った。
夏美自身、そうとしか思えなかった。意識不明の間に、つかの間見た悪夢。そう考えた方がうまく説明がつく。
けれど退院してから数日後、夏美はふと気付いた。
鞄に付けていたストラップが失われていた。慌てて探したが見つからない。もしやと思い、事故当時着ていたジャケットのポケットを探った。
そこには、破損した状態のストラップがあった。
「夢」と同じように、鈴の潰れたストラップ。
夢じゃない。
あれは、きっと現実だ。
記憶がまざまざとよみがえる。恐怖と悲しみと、せつなさ。

夏美は再び実家に戻ることにした。土日の休みを利用して、寄り道せずにまっすぐ母のいる町に向かった。あらかじめ母に連絡を入れると、車で迎えに来てくれるという。

夏美は迷った末に花束を買った。

言い忘れた言葉を、言うために。

クラクションが鳴った。

夏美ははっと我に返る。顔を上げると、見慣れない白い車があった。一瞬勘違いかと思ったが、助手席に母の姿がある。夏美を見て、微笑んでいる。運転席には見知らぬ男性。おそらく、彼が母の結婚相手だろう。

携帯電話をぎゅっと握る。ストラップの鈴が、くぐもった音を立てた。

「お前さえ」と呟いた母の顔が脳裏をよぎる。母は、今も自分を疎ましく思っているだろうか。真実を尋ねるのは酷く恐ろしく感じられる。それでも、夏美は決めていた。母にとっての自分の存在。それをもう一度、きちんと確かめようと。

自分がもう一度、生まれ直すために。

もう一度、この世界で生きていくために。

『居場所はあるよ』

耳の奥で聡の言葉が蘇る。

そうだね。

声に出さず、呟いた。

例えこの先何が待ち受けていても、夏美にとっての居場所はここにある。

母の笑顔が、目にしみて痛い。

今なら心から言える。

花束を抱え直して、夏美は車へと駆け寄った。

「お母さん、おめでとう」

四（後書き）

長々とお付き合いありがとうございました。ちょっぴり涼しくなって頂けたら嬉しいです。まだそんなに暑い時期ではありませんがw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5494t/

かえりみち

2011年6月10日09時56分発行